

黒田龍之助著「はじめての言語学」講談社現代新書 2004年1月20日刊を読む

1. 言語学は科目である

- (1) もしあなたが「言語学は難しいものに違いない」と想像しているとしたら、それはまったく正しい。およそ学問と名の付くもので、やさしいものなんて一つもない。言語学だって例外ではない。
- (2) でもこの本はあんまり難しくない。なぜならこの本は「言語学は一つの科目である」というつもりで書かれているからである。
- (3) 科目というのは本格的な学問への入口という意味である。高校にも数学や化学といったようなものがある。科目は学問と違って無限に広がっているわけではない。ある一定の内容をしっかりと押さえるだけでいい。だからそんなに難しいことにはならない。そしてそれを卒業したらまた先へ進めばいいのである。そういう意味で、まずは科目としての言語学の世界にご案内しよう。
- (4) 単なる科目だとしたら、それに「者」をつけて言語学者なんていうのもちょっとおかしな気がする。たしかに数学者や化学者などとふつうに使う。しかしそれぞれの本当の専門は微分位相幾何学だったり、有機合成化学だったりするのである。
- (5) わたし自身について少し。わたしも厳密な意味では言語学者ではない。でも専門は何かと聞かれて、たとえば「スラヴ諸語における両数の研究」などと偉そうに言えば、相手は絶対に引いてしまう。そこで「スラヴ語学学です」と答えてお茶を濁す。それでも「そのスラヴって何ですか」とさらに質問されたりする。そういうのを何百回と繰り返すのは面倒。そこでわかりにくいスラヴを省略して「言語学です」と、もっと大雑把なことをいって日常生活を送っている。プロフィールを書くときにも、言語学者としておくともあまり突っ込まれないので便利である。でも本当はちょっと恥ずかしい。
- (6) 現在はあらゆる学問が細分化されている。言語学だって例外ではない。昔は一人で言語に関する学問すべてを扱う偉い人もいたが、いまでは無理だと思う。だから言語学なんていう漠然としたものを専門にしている人もいない。ふつうは認知言語学とか社会言語学とか、さらにはバントゥ諸語アクセント研究というように、もっと具体的なテーマを追究しているものである。『一般言語学講義』なんていう有名な本があるから勘違いしそうになるけど、『一般言語学』という専門分野は存在しない。

(7)言語学は複雑な学問分野がその背景にあるので、研究者によっては意見が異なることもたくさんある。しかしここでは一つの科目なので、いろいろある中でも、まあ言語研究に携わる人たちが「これは常識だよ」と(たぶん)考えているような基本的なことを紹介していく。

(8)とくに理解してほしいのは、言語に対する考え方である。知識ではない。言語をどう捉えるかということが大切なのだ。だから細かく難しそうなの専門用語はなるべく使わないようにしたい。

(9)さらに著名な言語学者の名前もほとんど出てこない。歴代の優れた言語学者たちのおかげで今日の言語学があることは間違いないのだが、見慣れない外国人名を見ただけで「なんだか難しそうだな」と敬遠されてしまってはいけない。そこでそういう偉い人たちの考え方だけを紹介する。名前は出てこないけれど、いろんな人が長い時間をかけて言語学を築いていったことは忘れないでほしい。

(10)ことばを扱う関係上、世界中のさまざまな言語が登場する。だがシヨナ語とかバサ語とかコサ語などという馴染みのない言語名が出てくると、それだけで恐怖を感じる読者もいるかもしれない。でもそのときは恐れることなく、「へー、こんな面白い言語もあるんだ」と考えてほしい。世の中は広いのである。日本語と英語だけをもとに、世界の言語はこんなものか、と置いていただいても困る。ときどきそういう考えの《言語学者》がいて、もっと困る。

(11)人はどういうきっかけで言語学に興味を持つのだろうか？

(12)わたしは高校生の頃から外国語に広く興味があって、外国語の世界全体を捉えるために言語学を学びたいと思った。言語学を知れば外国語が上達するんじゃないかと期待していたのかもしれない。ところがこの考えはあまり正しくはなかった。言語学と外国語学習は別のものであり、外国語学習のために言語学が存在するのではない。

でもまったく無関係というわけでもなかった。言語学を学んだことが、外国語学習にずいぶん役に立った。外国語だけでなく、日本語を正しく捉えるためにも大切なことがわかった。だから多くの人に言語学を知ってもらいたいと思っている。

言語学を始めるには、ことばに興味があるだけでいい。ことばだったら、外国語でも日本語でもかまわない。それにだれが学んだっていい。たとえ高校生でも興味があれば言語学を学んでいいと思う。残念ながら日本の高校までの教育プログラムに、言語学という科目はない。その代わりにこの本を読んでくれる高校生がいたら、なにより嬉しい。

(13)わたしは大学に勤めて、言語学を教えている。大学には言語学という科目がときどきある。いままでにいくつかの大学で言語学を教えてきた。でもそれだけではない。外国語科目も担当している。こちらはあらゆる大学で開講されており、わたしの仕事も外国語を教えるほうがメ

インである。とにかく、いつでも言語と関係のある仕事をして、言語について考える生活を送っている。

(14)外国語の教師として、学生には多くの言葉に触れてもらいたいといつも思っている。いろいろな語学を勉強する人を応援したい。この本の中にもそういった話がたくさん出てくる。

(15)そういうところが、ふつうの言語学入門書とはちょっと違うかもしれない。

P3 ~ 7

2. ロシア語教師から英語教師になった私

(1)実は最近、英語の教師になってしまった。

(2)わたしがそれまで十数年にわたって生活の糧としてきたのはロシア語である。大学や講習会で教えたり、教科書を書いたり、テレビ講座で講師を務めたりしてきた。それが勤務先を移動するのに伴い、教える言語まで変えてしまったのである。ロシア語教師としてのわたしを知っている人は、意外に思われるかもしれない。本当のことをいうと、わたし自身も驚いている。人生は先が分からない。

(3)ロシア語から英語へという、こんなアクロバティックな芸当ができるのは、新しい職場の人が認めてくれたということがなにより大きい。感謝しております。そしてそれに加えて、わたしの中には言語学が流れていることが、これを可能にしたのだと思っている。

(4)英語だろうがロシア語だろうが、授業は楽しくしたいと考えている点には変わりはない。そのときのベースはわたしにとって言語学なのである。ふつうの英語の先生に比べれば、わたしは英米文学の知識が不足しているし、英語圏の社会背景についても不案内である。その分を言語学で埋めてなんとか学生を伸ばそうと日々悩んでいる。わたしにとって言語学はとても実用的なのである。

(5)言語学はいままでと同様に担当している。新しい勤務先では、理工学部 1、2 年生を対象にした「総合文化ゼミナール」という授業の枠で言語学入門を開講した。そのときの学生たちの反応などをもとにしながら、なるべく難しい用語を使わないで、言語学の基礎の基礎をまとめようとしたのが、本書である。

(6)本書には学生たちが授業中に書いてくれた小論文があちこちに活かされている。とくに、ある学生の書いた小論文の中に《記号の体型》というのを見つけたときには、もっと授業を分かりやすくしなければと思い、本書を書くきっかけにもなった。

(7)言語学は学者だけが独占する「学問のための学問」ではない。このことを強調するため、本書ではわたしたちに身近な日本語や、外国語学習に関する話をふんだんに盛り込んだ。もう一度繰り返すが、本来の言語学はもっと理論的なものである。それでも、具体的な言語にまず興味を持ってほしいというのがわたしの願いなのだ。

(8)英語の教師になったからといって、急に英語を礼賛するつもりはない。英語がすべてではないし、英語にしか興味がないなんてつまらないと思っているところは、以前となんら変わるところがない。でも同様に、ロシア語にしか興味がないのもつまらない。もっといろいろな言語に触れてほしい。

(9)わたしはこの先もいろいろな言語に触れていくと思う。誰かが、たとえば指導する学生がある言語を研究したいといい出したら、たとえその言語を知らなくても、学生と一緒に勉強を始める。このような姿勢を持つものこそが言語学者ではないか？

P248 ~ 250

[コメント]

言語学というベースがあるから、ロシア語教師から英語教師になっても大活躍なさっている黒田先生。

基本となる専門領域をしっかりと持つことがどれほど役に立つかを、身をもって示して下さっている黒田先生。

その大本になっている言語学の基礎を本書によって学ぶことができる読者は幸せだ。語学教師の必読書。

- 2010年9月22日 林 明夫記 -